

1 はじめに

わが国が少子高齢化社会と呼ばれるようになって久しい。城南学区でも、年少人口の減少は続き、学級数が削減されてきた。その高齢化の現状を認識し、それに伴う課題を自分のこととして考え、よりよい解決に向けて行動していくことが必要とされる。高齢者と触れ合ったり、高齢者のことを考えたりする機会をもたせることで、子どもたちが、高齢者が感じる生活上の苦勞を知り、皆が幸せに過ごせる社会を作っていくために、思いやりのある行動を取れるようになることを願って実践を行った。

2 実践の概要

(1) 福祉とは何か

福祉を身近に感じることができるよう、高齢者福祉の学習を中心に実践を行っていくこととした。そのために、子どもがお年寄りと接する機会を増やすことを考えた。

9月の敬老会では、5・6年生の児童は、お年寄りへの手紙を手渡し、自分がいまがんばっていることを話したり、お年寄りの話を



資料1 敬老会で手紙を渡す様子

聞いたりした。

敬老会の後、ある児童が書いた「手紙に手でアイロンをかけてしわを伸ばし、「これは宝物だわ」と言ってもらえたのがとてもうれしかったです。」という感想を紹介した。子どもたちは、自分たちの書いた手紙がそこまで喜んでもらえるという事実にとっても驚いていた。そして、お年寄りにもっと喜んでもらうための方法の話し合うと、「敬老の日におばあちゃんのお手伝いをする」「肩たたきをしてあげる」など、すぐに行動に移すことのできる意見が出た。

翌週、お年寄りのために行動した感想を発表させた。始め、子どもからは、「喜んでくれた」という意見が中心であったが、途中から、「うちのおじいちゃんは、最近、腰が痛くてあまり動けない」といった、お年寄りの苦勞に関係する意見が出始めた。そこで、身近なお年寄りがどんな苦勞を感じているのか調べることにした。

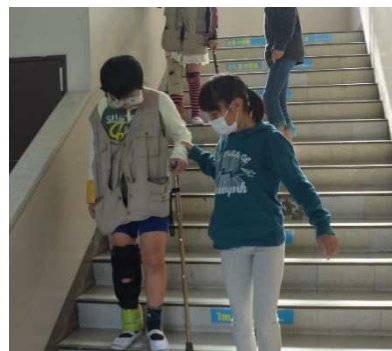
(2) お年寄りの生活を調べよう

子どもたちは聞き取り調査を行い、多くの家庭のおじいさん、おばあさんが生活の中で身体的な苦勞を感じる時があることを知った。そして、その多くが階段やトイレなどの段差を移動したり、腰を屈めたりする場面であった。実際に、

校内の階段やトイレの様子を調べると、階段やトイレには手すりが設置してあったり、段差がなくしてあったりしてあり、お年寄りなど、体が不自由な人に優しいユニバーサルデザインになっていることがわかった。

(3) お年寄りの苦勞を体感しよう

お年寄りの苦勞をより理解して欲しいと考え、福祉実践教室で高齢者疑似体験を行った。子どもたちは、体の重さや視野の狭さに驚き、中にはうまく歩けない子どももいた。そんな子に対しては、ペアの子がやさしく手を差し伸べて補助していた。体験後、子どもたちからは、「足が重くて階段でつまずきそうだった」、



資料 2 高齢者疑似体験の様子

「やさしく案内してくれたから安心した」、「町で困っているお年寄りがいたら手助けをしたい」といった感想の声があがった。

(4) お年寄りの苦勞を伝えよう

お年寄りの生活や苦勞について学び、日常生活において身体的な面や精神的な面で苦勞があることを理解した児童に対して、改めて、自分たちに何ができるかを投げかけた。子どもたちは、11月の城南 CITY カーニバルでお客さんに伝えようと考え、意見を発表していった。しかし、理由を問い返すと、「他の



資料 3 カーニバルの準備の様子

の学年の子はお年寄りの生活の苦勞を知らないから教えてあげたい」といったものであり、学習のねらいからは、ずれたものであった。そこで、何のためにお年寄りの苦勞を伝えるのか、再度問い掛け、話し合わせた。



資料 4 カーニバルで接客する様子

話し合いの中で、子どもたちは、苦勞を教えてあげるだけでは足りなくて、来てくれたお客さんが少しでも体の不自由な人のことを考えて、思いやりをもって行動できるようになることが大切であると気づいていた。そして、子どもたちは、お客さんにお年寄りの苦勞を伝え、思いやりをもってもらうために、自分たちが経験した高齢者疑似体験をしてもらうことを考えた。カーニバルでは、どの子どもも、お客さんに対して表情や言葉遣い、案内のしかたなど、あらゆる面で思いやりが伝わる接し方を心がけることができていた。

3 おわりに

実践後のある日、子どもが「先生、先週の土曜日に公園の落ち葉拾いをしました。」と言ってきた。皆が幸せになるように、自分ができることをする、という思いやりのところが根付いてきたように感じた。